

■（８８）難解な話を例える定番の物差しは…

「光速で飛び回る素粒子に対して水あめのように作用して、動きにくくしたと考えられている」。ヒッグス粒子発見か、という科学的な大事件を報じる記事で、粒子の説明に使われた表現だ。科学の素人にもわかりやすく解説するため、水あめに例えていた。

記事は中身が相手に伝わらなければ意味がない。試験の小論文や宿題の作文も同じだろう。記者は常に、難しい話をいかにわかりやすく書くかを追求している。その手法の一つが身近なものに例えるやり方だ。高さならば富士山や東京タワー、スカイツリーを物差しに使う。容積の定番は東京ドームだろう。原発事故で放射能に汚染された土の量も「東京ドームなら32.2杯分」と表現した。ビールの消費量はドームの〇杯分と換算。そのドームが完成する1988年までは、国内初の高層ビル「霞が関ビル」が主に使われていた。ともに東京の施設なので、各地の記事ではより身近な「ヤフードーム」「ナゴヤドーム」「札幌ドーム」が登場する。

ところで朝刊の記事の文字数は「文庫本1冊」と言われる。電子書籍用の新端末が相次いで登場している。この表現のまま、子どもたちは新聞の情報量をイメージできるのか。（山）